5. 環境研 OB からの寄稿（寄稿者名について 50 音順に掲載）

5.1 環境研での懐かしい思い出

稲葉 次郎
財団法人 環境科学技術研究所 元理事
元環境動態研究部長

昨秋、島田理事長から環境研設立 30 周年記念として開催された国際シンポジウムの内容をまとめた Radiation Protection Dosimetry の特集号が届いた。設立 30 周年を心からお祝いするとともに、そこに発表された論文の中に多くの顔見知りの環境研研究員の名を見つけて研究の進展を感じ、大変に嬉しい思いをした。

私は内地留学やコーネル大学留学さらにはウイーンの IAEA 出向などを含めて 36 年間を放医研で勤務し、その後に 1999 年 4 月から 6 年間を環境研にお世話になった。環境動態研究部着任当時、同部は陸圏環境グループと気水圏環境グループから成り、種々の気象条件を再現できる全天候型人工気象実験施設など研究施設もほぼ完成した中、両グループとも多数の有能な若い研究者を擁して活発な研究活動が始まっていた。大型再処理施設からの放射性物質の環境での動態を明らかにしようとして行われていた多方面からなる研究はいずれも重要で私にとっても大変に興味深く、それら研究の進展にできるだけ力を尽したいと努力したことは今でも私自身の懐かしい思い出になっている。

研究の成果は学術集会や学術誌に発表された。その中で、私の任期中に動態研究部が中心になりながら環境研を挙げての国際シンポジウムを 2 回と保健物理学会の第 39 回大会を国内外から多くの研究者の参加を得て六ケ所村の地で開催し、2 冊の立派な国際シンポジウムプロシーディングスを刊行できたのは幸いであった。

「環境」は決して一様なものではない。地域特性は大きいし、時間によっても変動する。そのことを肝に銘じたうえで、実環境で精度の高い経時的な観測を行い、実験研究も併せて観測値に対する影響因子を明らかにし、それらを用いてその環境内での種々のコンパートメント間の移行係数を導き、それらを含んだ環境モデルを構築し、さらには住民の生活様態も考慮に入れ、よって現実的で精度の高い住民の線量計算さらにはリスク評価を可能とすること、すなわち排出放射性物質による環境影響に関する調査研究は、放射性物質のみならず化学物質も含めた今日的な環境問題を科学的に正しく理解するうえで極めて重要であり、やりがいのある研究であるといえる。環境研の調査研究の今後の進展を大いに期待する所以である。

私は三沢での 6 年間を単身生活で送った。最初の冬こそ寒さに戸惑ったが、環境研の素晴らしい仲間のおかげで日々の研究を含め毎日を楽しく過ごすことができた。と同時に、青森県は十和田や八甲田など四季を通じての美しい自然と多くの文化遺産に恵まれた地、それを私自身が十分に楽しむことができ、さらには頻繁に千葉や横浜から訪ねてきた友人や家族も楽しむことができた。今はこの楽しかった 6 年間を懐かしく思い出す。